E.SHIBUSAWA

［逆境を乗り越えるための渋沢栄一の教え］

text：渋澤 健

逆境の時こそ、力を尽くす

第2回 「と」の力で新たな創造を生みだす

大リーグで大活躍中の大谷翔平選手が、実は「論語と算盤」を読んでいたということをご存じでしょうか。その「論語と算盤」の第一章、第一項に「論語と算盤は甚だ遠くして甚だ近いもの」という教えがあります。

「私は不断にこの算盤は論語によってできている、論語はまた算盤によって本当の富が活動されるものである、ゆえに論語と算盤は、甚だ遠くして甚だ近いものであると始終論じておるのである。」

正しい道理をわきまえる倫理と利益の追求は遠く見える関係性かもしれない。しかし、実は合致するという考えです。そして、「論語と算盤」という目標を達成するために必要なのは、ど真ん中の存在である「と」になります。

イエスかノー、白か黒、投手か打者という「か」の力に留まることなく、一見矛盾する関係でありながらも、合わせることに努めるのが「と」の力です。

「か」の力は区別して選別して進める、効率性を高める合理的な力です。ただ、既に存在している状態を比べて進める「か」の力だけでは新しい創造はありません。

一方、「と」の力は、矛盾、難しい、無理、無駄のように見えます。ただ、正しい答えや成果を直ちに見出せなくても、忍耐強く努力と試行錯誤を繰り返すことによって、新しいクリエーション、創造が生じます。

大谷選手の二刀流は、まさに「と」の力。我々に新しい感動を与えてくれました。

大谷選手に「論語と算盤」を読むように勧めたのは栗山英樹監督でした。北海道日本ハムファイターズ監督に就任して２年目のとき、チームはリーグ戦で最下位に沈み、新米の監督は悩みました。自分はプロ野球の監督が務まらないかもしれない。

そんなとき、読書が好きな栗山監督が「論語と算盤」のページをめくっていたら、渋沢栄一からこのようなメッセージが届きました。

「目先にすぐ成果が出ないとしても、それはまだ機が熟していないだけだ。あきらめることなく、忍耐強く進めるべき。」

この栄一からのメッセージで気持ちを持ち直したご自身の経験から、栗山監督は日ハムに入団した若手選手の１年目のシーズン終了時に、必ず全員に「論語と算盤」を渡していらっしゃるようです。

プロの野球選手と言っても二十歳前後の若手です。「意味分からん」と挫折した選手も多いでしょう。しかし大谷選手は「監督、これ難しいですね」と言いながらも、しっかりと手元に置いていたようです。

もちろん「論語と算盤」との因果関係は証明できませんが、その後、大谷選手は大リーグにおいても二刀流でデビューして、その後の右肘のトミー・ジョン手術など逆境に屈することなく、大活躍しています。

見えない未来を信じて、現実につなげる。これも、「と」の力です。日本の昭和モデルが終わり、そのモデルを引きずっていた平成も終わり、令和が始まりました。超少子高齢化が加速する日本では、未来が見えずに不安を感じる日本人が多いでしょう。

そんなときだからこそ、「と」の力が大事である。大谷翔平選手と渋沢栄一が我々に教えてくれています。